
怖い話2

あてな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怖い話2

【Nコード】

N7906K

【作者名】

あてな

【あらすじ】

首が長くなった女の話

(前書き)

ホラーにしては怖くないかも……？

「啓太！」

俺の彼女の声だ。

声が聞こえた方に俺は振り返った。

「今日はこんな所に連れて来てくれて、ありがとうね！」

「いや、デートなんだし、当然だよ」

彼女は喜んでくれてるようだ。

俺達が来ているのは、クリスマス・イルミネーション。

キレイなイルミネーションが洋子の心を躍らせているみたいだ。

「ほんとにキレイだね……。啓太……」

「そうだな、来て良かった」

この後はホテルに泊まって、翌朝のクリスマスを楽しむに予定である。

しかし、クリスマスイブと言っても冬なので、寒い。

「なあ洋子、そろそろホテルに行かないか？」

「えー、もうちょっと見ていこうよー」

しかし洋子は駄々をこねてしまった。

仕方ないので俺は寒さを我慢してイルミネーションを楽しむ事にし

た。

「もういいかなー」

なんとか寒さに我慢していると、洋子がようやく答えてくれた。既にイルミネーションを見始めてから2時間は経っていた。

「じゃあ、行くか！」

この寒さから開放されると思うと、なぜか嬉しかった。

「あれー？ 啓太嬉しそう。なんか変な事考えてるでしょ？」

「え？ 考えてないよ」

あまり嬉しそうにしていたせいか、洋子に変に思われてしまったようだ。

そんな他愛の無い話をしているうちに俺達は、目的のホテルについた。

「おい洋子、ついたぞー」

「え！？ 何この高級ホテル！？ 啓太たったら……」

そうだ、俺は今日の為に今週の飯代まで使ってこのホテルの予約を取った。

明日以降はずっと飯抜きなのである。

「どうだ？ 凄いだろ！」

「うん！ 凄いね！」

「まあ、とにかく入ろうか」

そんな事より俺は、早くホテルに入って温まりたかったのだ。
ホテルに入るとホテルマンが声をかけてきた。

「洋子、ここで待っていてくれ、チェックインを済ませてくるから」

「うん。分かった」

洋子をその場に置いて、俺はホテルマンについて行き、
チェックインを済ました。

「お待たせ、じゃあ行こうか」

「うん」

俺達は近くにあったエレベーターを乗り、4階まで移動した。
エレベーターから降りると、4階の廊下は静かだった。

「えーっと、404号室……。404号室……」

「ちょっと……。404号室……。って何それ……。不吉じゃない……」

404号室……。確かに不吉な番号だ。

しかしそんな事を考えて楽しめなくなるのも難なので、
俺はきっぱりと考えるのをやめ、部屋を探した。

目的の404号室は、エレベーターの前から少し進んだところに見

つかった。

「さて、入ろうか」

俺は404号室のドアを開けた。

特に何も感じることは無かった。

俺も洋子も部屋に荷物を置く事にした。

洋子は荷物を置くのが終わったのか、俺に話しかけてきた。

「私お風呂行ってくるね!」

「うーん。そうか。いつてらっしゃい」

「えー? 啓太は来てくれないの?」

「俺はちょっと休んでから行くつもり」

結構疲れてたみたいだ。部屋で休んでからにしたかった。

洋子は少しがっかりしているみたいだった。

「そう。じゃあ先に行ってくるね」

そう言い残すと洋子は部屋から出て行った。

そして俺はその後10分程休憩をし、外をぶらつく事にした。

部屋から外に出てみると、4階の廊下はやはり静かだった。

なんとなく廊下を見渡していた俺は、となりの405号室が開いて驚いてしまった。

「あら? 啓太じゃない」

部屋から出てきたその人物は俺の名前を呼んだ。

「あ！ 美由紀じゃないか」

実は美由紀は、俺の彼女なのだ。

俺はいわゆる二股という奴をしてしまっている。

「こんな所で会うなんて奇遇ね」

「そうだな」

しかしこんな所で会ってしまうなんて、運が悪いのか……。

今はもう一人の彼女の洋子も居るのだ。

こんな所を見られては大変な事になってしまう。

「俺、となりの4号室に居るんだが、来ないか？」

「あら、そうなの？ ならお邪魔しちゃおうかしら」

俺はこの時重大なミスに気づいていなかった。

部屋に入ると、美由紀が俺に話しかけてきた。

「ところで、どうしてここに居るの？」

「えっと、まあ……、仕事で……」

実際は仕事などではない、洋子と一緒に泊まりに来ているのだ。

「今暇でしょ？ どう？」

美由紀がベットを見ながら俺に聞いてきた。

「まあいいか」

俺は安く答えてしまった。

洋子はまだ風呂に入っているのだし、別に大丈夫だろう。

俺と美由紀はベットに入ると、やり始めた。

しかし始めて数十分、急に部屋の扉が開いた。

俺はハッとした。洋子が戻ってきたのだ。

「え……？ 他に誰か来てたの？」

美由紀が不思議そうに聞いてきた。

「あ……えっと……その……」

俺はなんともいえなかった。

しかし扉を開けた主はどんどんこちらへ近いづいてくる。

だが、どうする事も出来ない。

こないきなり来られては、ごまかすことも出来なかった。

ついに洋子はベットの前まで来てしまった。

「何してるの……？」

「えっと……その……」

俺は何も答えられなかった。

「私帰るわ」

美由紀がそう言って服を取ると立ち去ってしまった。
洋子が怒りながら美由紀に怒鳴る。

「何よアンタ！」

しかし美由紀は無視して部屋に戻ってしまった。

「啓太、どういう事よ」

「ごめん」

謝って許してもらえないとは思えない。

俺が謝っていると、洋子は更に怒ってしまった。

「出てって！」

俺は言われるがままに出て行った。

というよりは追い出されてしまった。

部屋から出た俺は後悔した。ちょっと考えれば分かることだ。

自室でやってしまえば、いずれ戻ってくる洋子にバレてしまうのは当然なのだ。

4号室からは洋子の泣き声が聞こえた。

俺は後悔しながら隣の部屋の美由紀に泊めてくれと頼んだ。

「はぁ？ あんたふざけてんの？ 浮気する奴なんか泊めるわけな

いじゃない」

「ごめん……」

そりゃそうだ。普通は泊めてくれるわけなんてない。
この寒い廊下で寝るしかないのだろうか……。

「しかないわね……」

諦めていた俺は、その答えに驚いた。

「ありがとう……」

俺は心の底から礼を言った。

美由紀に許可を貰った俺は部屋に入った。

「で、いつから浮気してたのよ」

「去年から……」

「はぁ……」

俺が答えると美由紀は残念そうにため息をついた。

「最低」

「ごめん……」

言われて当然の事をしたのだ。
謝るしかない。

ふと時計を見ると既に夜の12時だった。
流石にそろそろ眠い。

「もう寝ましょう」

「ああ……」

美由紀も眠かったのか、俺達はそのまま寝る事にした。

翌日

朝になると美由紀は俺を部屋から出るように言った。

「朝になったらもういいでしょ？ 早く出てってよ」

「ありがとう……」

俺は礼を言うと部屋から出る事にした。

部屋から出た俺は隣の4号室の前に立ち、
和解をしようと洋子に声をかけた。

「なあ洋子、昨日は本当にすまなかった。だから……」

だが部屋から返事は聞こえなかった。
ドアに鍵がかかっているか確かめてみた。

「開いてるのか……」

俺と洋子の仲なら入っても大丈夫だよな……？

そう思った俺は4号室のドアを開けることにした。

ドアを開けた俺は腰を抜かしてしまった。

洋子の体は非常に悲惨な事になっていた。

「うわああああああ！！」

俺はあまりの恐ろしさに叫んでしまった。

無理もない。そこに居た洋子は洋子には見えなかった。

人の首とは思えない首になっていた。

普通の状態の洋子の身長よりかなり上にロープがあるのだが、そこに洋子の体がぶら下がっていた。

そしてなぜか洋子の首が伸びていて、洋子の身長では届きそうに無い床に

足が付いているのだ

洋子の顔を見ると、

よく分からない液体でぐちゃぐちゃになっていた。
体の穴という穴からよく分からない液体が沢山出ていた。

「死んでるんだよな……これ……」

俺が浮気をしていたせいで、洋子は自殺してしまったのか……？

俺のせいで……。

「洋子……ごめん……」

その後どうにかして平静を取り戻した俺は、警察を呼んで事情を説明するとその日の内に家に帰ってこれた。

「洋子……」

俺は酷く後悔した。俺のせいで洋子は死んだ。それだけで俺の心はボロボロになった。

家についた俺はかなり疲れていたのか、家に入るとそのまま寝室に向かい、寝る事にした。

「ユルサナイ」

夢の中で洋子が俺に言った。
もうそれは洋子には見えない。
首が長くて、恐ろしい怪物のように見えた。

「洋子、ごめん」

「ユルサナイ」

洋子は許してくれそうなかった。

「ごめん」

「啓太も……死んでよ……」

洋子が悲しそうに俺に言った。

「ああ……。それで洋子の気が晴れるなら……」

俺は洋子の気が晴れるなら死んでも良いと思った。

「うう……」

苦しい。急に首が誰かに絞められたみたいに。

しかし、洋子も同じように苦しかったんだ。

俺はそう思うと不快には感じなかった。

翌日

啓太は寝室で誰かに首を絞められて死んでいた。

しかし部屋には鍵がかかっており、誰も入る事は出来そうになかった。

そして啓太の首は人間の首とは思えないほどに伸びていたようで、最初に発見した人は酷く驚いたようだ。

実は人間の首は伸縮するように出来ており、首吊り自殺をすると体の重さで首が引っ張られて首が伸びるように出来ている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7906k/>

怖い話2

2010年10月9日21時09分発行